

随想「パスカル」

角田 茂

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.

「人間は自然界で最も弱い1本の葦である。しかし、それは考える葦である」(パスカル著『パンセ』より)

パリ4区、市立公園内にあるサン・ジャックの塔、地上階にはパスカルの像がある。文学や哲学の好きな友人との待ち合わせに、この場所を私はよく使っていた。ガリレオの弟子、トリチェリによって、『トリチェリの真空(1643年)』が発見されると、パスカルは1646年、このトリチェリの実験を追試し、彼はこの時、水銀柱が大気圧を示すことを直感した。その翌年、パスカルは故郷、クレルモン＝フェラン在住の義兄にピュイ・ドゥ・ドーム山の山麓と山頂で水銀柱の高さを測定するよう依頼し、その実験結果から水銀柱の高さが大気圧を示すことを確信した。1648年、パスカルはこのサン・ジャックの塔で大気圧測定の公開実験をしている。大気圧の単位がミリ・バール (mbar) からヘクト・パスカル (hPa) に変わったのも、世界で最初に大気圧を測定したパスカルに敬意を表してのことであった。



パスカルは、『パスカルの原理』など、流体静力学の先駆者であるとともに、数学者として、確率論、数学的帰納法の創始者でもあった。徴税請負人の父親の仕事を助けるために歯車式計算機を発明し、この改良型をスウェーデン女王クリスティーナ(国王グスタフ2世アドルフの娘)に献呈している。彼女は、当時のヨーロッパで、最高レベルの学識を備えた権力者であり、オランダ在住のグロテウスやデカルトなど知識人を宮廷に招いて話を聴いている。パスカルとデカルトは、1647年パリで会い、『トリチェリの真空』について議論しているが、ひょっとすると、ふたりを引き合わせたのは、女王クリスティーナであったかもしれない。

生前に書かれた断片的な覚え書きは、死後『パンセ』としてまとめられた。この中には哲学から神学にいたる膨大なパスカルの思索が詰まっている。人間の思考回路についての「幾何学の精神 (esprit de géométrie)」と「繊細の精神 (esprit de finesse)」は有名である。この思考回路は推論的思考回路と直感的思考回路であり、今はやりの言葉で言うならば、左脳の働きと右脳の働きになる。400年近く前に、この2つの思考回路を洞察していたことに、私は驚きを憶える。かつて、音楽は右脳の働きと言われていたが、最近、MRIを使った、楽譜を見て楽器を演奏する実験で、興味深い結果が報告されている。いわゆる初見 (prima vista) での演奏、実のところ、本を読むのと同じように、左脳が深く関与していることがわかってきた。本を読むのも、楽譜を読むのも、脳機能としては同じことである。代々楽譜を使わないロマの演奏家たちは、主として右脳を使って、楽器を演奏していると思われる。30年以上前の話であるが、私がブダペストのレストラン『ツィタデッラ』で食事していると、ロマの楽団がやって来た。彼らにコンチネンタル・タンゴの『ジェラシー』をリクエストすると、すぐにヴァイオリニストが冒頭の部分を弾き始め、それに続いて楽団員は演奏をした。その演奏は、右脳を存分に使った見事なものであった。

キリスト者としてのパスカルは、「人間は自然界で最も弱い1本の葦である。しかし、それは考える葦である」という有名な言葉を遺している。私の好きな旧約聖書の言葉に、「傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく」(イザヤ書42:3)という言葉がある。パスカルが1本の葦という言葉を使う時、彼の頭の中にはイザヤのこの言葉があったはずである。人間は自然界で最も弱い、傷ついた1本の葦である、これがパスカルの真意であると思われる。私の持論、「人間はすべて障害者である。最大の障害者は自分の障害に気づいていない人である」ということと重なる考えである。現在の世界情勢を俯瞰すると、傷ついた葦を折ったり、暗くなってゆく灯心を消すような考えが、地球上至る所で蔓延している。すべての人間が、「傷ついた1本の葦である」という自覚を持ち、弱者に対する視線を忘れず、自分の頭でしっかりと考えて行動する、そのような世の中になってほしいものである。

パスカルは、1662年、亡くなる直前に、国王ルイ14世から営業許可を取り、パリにおいて乗合馬車 (omnibus オムニビュス) 制度をつくった。ラテン語の omnibus は、「すべての人間のために」という意味で、現在使われているバスの語源である。この乗合馬車事業の収益金は、すべて施療院 (hospis 貧しい人々のための病院) に寄付されている。

第 53 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (2/23) 『気狂いピエロ』 (1965) 報告

◆◆「映画とは何か？」という大上段に振りかぶった問いはさておいて、観る側にとってある映画作品を観た時、その作品が何を言いたいのかと思うのはごく普通のことである。気に入った女優の演技を見たい、人生や愛の形を感動をもって追体験したい、思わぬ展開に驚かされたい、映像美に酔いたい、等々。この気狂いピエロはそれらを裏切ってくれる。「何を言いたいのか？」私なりに簡単に言ってしまうと、決まった筋書きなどない世界で、偶然の出来事の中で人は生きている、しかしその中で自分の感情や生き方はどうなるのか、ということを描いているのかも知れない。



全体として、乾いた描写になっているのが、この作品の特徴であるが、それは、不条理劇というイメージを思い出させる。また、色々なパロディー的な描写も面白い。自動車事故の場面での女性の死体と木はダリの絵を思わせる。マリアンヌ（アンナ・カーリーナ）が「ローレル&ハーディ風」という場面があるが、この作品自体が、ドタバタ喜劇タッチを思わせる。喜劇も結局は悲劇であると言えるかもしれない。最後に、マリアンヌがピエロ（ジャン＝ポール・ベルモンド）と車の中、ベトコンが 117 人死んだというのを聞いて、「117 人という数字ではわからない、一人一人のことは...」という言葉が印象に残った。（白鳥保二）



◆◆この 4~5 月、ドリフのドタバタ・コントの再放送を見ていたら、マルクス兄弟（グルーチョ、チコ、ハーポ、ゼppoの 4 兄弟）の映画が下敷きにあることに気づいた。1970 年代に番組を見ていた当時はわからなかったが、巡り巡って 2020 年になって 1930 年代のアメリカ映画が日本風にアレンジされた姿で蘇っているのを見て、つい吹きだしてしまった。ローレル & ハーディはマルクス兄弟とほぼ同時代に活躍したコメディアンだが、ゴダールのお気に入りだったらしく、『気狂いピエロ』の女主人公にその名を口にさせ、活劇コントを演じさせている。これは引用好きのゴダールのほんの一例だが、この映画には文学・絵画・音楽・漫画・映画・社会的政治的状況の様々な素材が至るところに散りばめられている。しかしそのもっとも印象的なのは、ラストシーンではないだろうか？ 主人公が自爆した後、広大な空と海だけの映像に、画面外の声でランボーの詩句が重ねられる。「また見つかった！ 何が？ 永遠が 太陽と共に去った 海が」（寺尾次郎字幕版）。1960 年代パリから南仏へ逃避行を企てたあげくに行き場をなくした男主人公に、19 世紀末ヨーロッパを脱出し各国を放浪した詩人の生き方が暗示されているのだろうか。それまでのドタバタ調を、ある種の格調をそなえた詩的言語へと一気に収斂させるゴダール。『軽蔑』（1963）のラストシーンもそうだが、ゴダールの水と空の映像には力と余韻がある。（浅井直子）

第 54 回奈良日仏協会シネクラブ例会案内 (7/26) 「海辺のポーリーヌ」(Pauline à la plage, 1983)

Pauline passe ses vacances à Granville en Normandie chez sa cousine Marion. Divers chassés-croisés amoureux s'ensuivent... Du côté de chez Proust, ou presque : les jeunes filles en fleurs, la plage, le flirt, les amourettes. Sauf qu'Eric Rohmer fait le grand écart entre les stéréotypes du roman sentimental édictés par Madame de Lafayette, et édulcorés dans les bluettes ordinaires, et la dialectique de la transaction amoureuse selon Marivaux et Musset. Rohmer est par ailleurs un excellent sociologue de son temps qui, sans coller à l'actualité et aux tics de langage à la mode, en dit plus long que la plupart de ses contemporains. *Pauline à la plage*, dont le titre a quelque chose d'enfantin, est, sous des dehors ludiques et hédonistes, une parfaite antithèse des films d'adolescents populaires de l'époque. C'est une œuvre infiniment complexe sur la passion et ses dérivés. Posant au cœur du récit un indispensable quiproquo qui servira de révélateur, le cinéaste va, par le biais du langage (« *Qui trop parole, il se mesfait* », est la citation de Chrétien de Troyes mise en exergue du film), faire la nomenclature des différents types de postures amoureuses : libertinage, sensualité, coup de foudre, fidélité, etc. (会場と日時は本誌 12 頁参照)

ポーリーヌは、ノルマンディ地方グランヴィルにあるマリオンの家でヴァカンスを過ごす。恋の行き違いが次々に起こる。花咲く娘たち、海辺、戯れの恋など、ほとんどブルースト的な世界がある。とはいえエリック・ロメールは、ラファイエット夫人によって吐露され、かりそめの恋の甘さを施された感情小説の紋切り型と、マリヴォーやミュッセによる恋の駆け引きの論法の両軸の間でバランスをとる。彼は時代の卓越した社会学者であり、時事問題や当世風の言葉づかいに密着せずして、それを多くの同時代人たちよりも長々と語る。タイトルはどこか子供っぽく、遊戯と快楽主義の外観を装いながらも、『海辺のポーリーヌ』は、当時の大衆青春映画の完全なアンチテーゼであり、情熱とその行き着く先についての、きわめて手のこんだ作品である。やがて真実を明かす役目を果たす、必要欠くべからずの「思い違い」を話の核心に据え、映画作家ロメールは、言葉を介在させて（映画の題辭にクレチアン・ド・トロワの「言葉多き者は災いの元」を引用）、放蕩、官能性、一目ぼれ、誠実さ等、様々な愛の形の一覧表を作っている。（シルヴェストリ）



現代アートに注目～新しい価値観と美意識

南城 守

天災、疫病、戦禍…。つくづく人間の歴史は多くの苦難を乗り越えながらいかに「生命の輝き」を実現させるか、その試練の集積であったように思います。人々はそこに美術・藝術を通じて奇跡を求め、その力を信じたのでしよう。

周知のように美術史に輝く名作には、逆境の中からの誕生秘話に彩られたものが多く、とりわけ大きな社会的変動の後には、今までにない美術動向が興っています。

たとえば、20世紀美術では、二つの大戦を経てダダやシュルレアリスム、そしてアンフォルメルが、また世界恐慌以降、近代社会の危機的状況にあって同時派生していった抽象表現主義運動などがそうです。苦境に直面することによって人間の深層心理の中に渦巻く赤裸々な真情が吐露され、アーティストの鋭敏な感性によって、それらは新たな価値観と美意識へと昇華されていったといえます。

はからずも今回、コロナウィルス自粛により中止となった奈良日仏協会美術クラブの講演会「モネとルノワール」の内容も、逆境の中で生み出された作品群に焦点を当て、華麗なる絵画世界誕生の背景を探ろうとしたものでした。激動の近代化の波にもまれ、幾多の苦難を乗り越えて、いかに自然の輝きと生命の喜びに満ち溢れた作品を残すことができたのか、アーティストにとっては順境よりもむしろ逆境を歓迎すべきでは…？といったお話です。

(正直、講演会後の多芸多才な参加者たちと一献傾けながらの自由気ままな美術談義が最大の楽しみでしたが)

ところで先日、奈良県立美術館で特別展「熱い絵画」を鑑賞しました。本年3月から続いた同館の臨時休館がようやく解かれ、コロナウィルス厳戒態勢の中での再開でした。

本展は1950年代以降の戦後美術を紹介するもので、フランスのコレクターでキュレーターのミシェル・タピエ(右写真)によって提唱されたアンフォルメル(Art Informel 非定型の芸術)が、当時の日本でいかに大きな共感呼び起こし旋風を巻き起こしていたかを検証する内容です。抑圧された日常、自粛を強いられる精神的苦痛、そして目に見えぬ不安への反動。戦後美術が問いかける「人間の在り方」を真摯に問う「造形」が展開されていて、原色と激しい筆致が織りなす展示空間は、えもいわれぬ緊張感を漂わせていました。強烈な「命の叫び」がそこにあったといっても過言ではありません。

実は、私自身過去に何度も50~60年代アートを紹介する展覧会に関わり、アンフォルメル藝術を理解しているつもりだったのですが、作品との一体感はいまだにないものでした。おそらく今日のコロナウィルスの恐怖体験が、当時の危機的状況と合致し時空を超えて共鳴したのだと思います。具象・抽象を問わず色と形がマグマのように燃え盛る熱いメッセージに圧倒され、非定形、不定形と訳されるアンフォルメル様式が、理屈抜きに琴線に触れる言いのない同調感を覚えました。さらに現代アートにおける観念的な「美学」だけではなく、物体として絵具の塊が放つ圧倒的な「存在感」、物が存在することの「崇高さ」に気づかせてくれる貴重な機会でもありました。

もとより50~60年代美術はもはや現代アートの古典と称されています。ならば100年に一度に例えられる危機的状況を体験し、これまでの価値観が揺らぎ、新しい生活スタイルが提唱される今日、果たしてどのような美術動向が誕生するのか。それは将来、激動の21世紀アートとして語られるようになるのでしょうか。

モネやルノワールが切り開いていったあの印象派のように、これまで各時代の最先端に位置するアーティストたちが目からウロコの衝撃を巻き起こしてくれたように、困難な状況を経て、これから生み出される現代アートがいかなる進展を見せてくれるのか、ますます目を離すことができなくなる今日この頃です。

特別展 **熱い絵画**
大橋コレクションに見る
戦後日本美術の力

白髪一雄「貞宗」1961年
京都工芸繊維大学美術工芸資料館

奈良県立美術館



会期 2020年5月19日(火)~7月5日(日)



2020 年度 ガイドクラブの案内

今年度のガイドクラブは 10 月 10 日(土)に奈良県桜井市の聖林寺と談山神社を訪ねます。行程は以下のとおりです。

| | | |
|---|------------------------|-----------------|
| 12:30 桜井駅(JR・近鉄)南口集合 | 12:50 バス乗車 | 12:58 聖林寺バス停下車 |
| 13:10~13:55 聖林寺拝観 | 14:08 聖林寺バス停バス乗車 | 14:24 談山神社バス停下車 |
| 14:35~16:20 談山神社散策・拝観、多武峰観光ホテル 5F レストランにて休憩 | 16:37 談山神社バス乗車 | |
| 17:02 桜井駅南口下車、解散 | 17:10 居酒屋「千宝」にて懇親会(有志) | |

- ◆参加費: 会員 1200 円 一般 1700 円 (要予約、定員14名)
- ◆申込先: Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300 (浅井)

◆案内: ニコラ・マイニさん

【聖林寺】 Temple Shôrin-ji

8 世紀初頭 (712 年) の創建。桜井市の町から少し離れた丘の上に建つ閑静な寺院。お寺の門からは三輪山全体が見渡せる。本堂には子安延命地蔵があり、安産の神として崇敬されている。寺には十一面観音像が安置されている。

Bâti au début du VIIIe siècle. Un temple calme construit sur une colline à l'écart de la ville de Sakurai. Depuis le portail du temple, vous pouvez balayer du regard l'ensemble du mont Miwa-yama. Dans le Hondô (bâtiment principal) se trouve une statue de Koyasu Enmei-jizô que l'on vénère en tant que divinité de l'accouchement facile. Le temple abrite une statue de Jûichimenn-Kannon.



【十一面観音】 Jûichimen-Kannon (Kannon aux onze visages)

8 世紀に造られた国宝。この仏像からは周囲のすべてを包みこむような独特の優しい雰囲気がある。多くの芸術家や美術批評家が感嘆している。この仏像には謂れがある。かつては大神神社の「大御輪寺」の本尊だったが、1868 年の神仏分離令のときに聖林寺に移管された。

Trésor National, datant du VIIIe siècle. De cette statue de Bouddha se dégage une aura de bonté qui semble envelopper tout ce qui l'entoure. Beaucoup d'artistes et de critiques d'art en sont très admiratifs. Cette statue possède une histoire ; autrefois, c'était l'idole principale du temple Daigorin-ji du mont Miwa-yama. Cependant, en 1868 à l'ère Meiji, au moment de la promulgation de la séparation entre bouddhisme et shintoïsme, cette statue a été transférée au temple Shôrin-ji.

【談山神社】 Sanctuaire Tanzan-jinja

藤原氏の始祖、藤原鎌足を祭神として祀る神社。鎌足は中大兄皇子(後の天智天皇)とともに、645 年の乙巳(いっし)の変で、有力豪族の蘇我入鹿を暗殺。森の中にたたずむ神社の境内には、高さ 17 メートルの十三重の塔(678 年建立、1532 年再建)を擁する。

Ce sanctuaire est consacré à Fujiwara no Kamatari, fondateur du clan Fujiwara, qui, avec le prince Naka no Ôe (futur empereur Tenji), fit un coup d'État en 645 (incident d'Isshi) et assassina Soga no Iruka, membre du puissant clan Soga. Le sanctuaire, enfoui dans la forêt, garde la pagode à treize étages de 17 mètres de haut (construite en 678, reconstruite en 1532).



【けまり祭】 Matsuri de kemari

毎年 4 月 29 日と 11 月 3 日に開催されている。けまりは、平安時代に宮中で行われていた足による古来の球技だが、こんにち参加者は宮廷の伝統的な装束を身に着け、足の甲を使って毬を蹴り、地面に触らぬようにする。La cérémonie se tient chaque année le 29 avril et le 3 novembre. Kemari est un jeu ancien de balle au pied à la cour impériale à la période Heian, aujourd'hui les participants sont vêtus en habits de cour traditionnels et tapent la balle à l'aide de cou-de-pieds en essayant d'empêcher qu'elle touche le sol.



COVID-19 dans l'Hexagone フランスにおけるコロナ

ピエール・シルヴェストリ

コロナウィルスの世界的流行は、感染した多くの国々が居住者を自宅にこもらせるという、先例のない対応を引き起こした。フランスは、ヨーロッパの他の国と同様、大きな打撃を受け、住民へのウィルス蔓延を抑えることを目的として、3月17日から隔離措置を講じた。2020年5月21日現在の被害状況は、2万8千人以上の死者と1万8千人近くの入院者を数える。

生活はウィルスによって混乱している。特にその原因である社会的距離の設置は、フランス文化においては当然のことではない。人々は離れて挨拶を交わし、互いに触れ合わず、マスクをしている人も多い。愛情を表現する仕種は稀になり、それが各人の態度や振舞いに深い影響を与えている。愛する人を抱擁できないのは辛いことだ。ほとんど二ヶ月間、街の通りは無人状態だった。商店は閉まり、文化やスポーツのための施設は利用できない。

国民の一部は、外出の自由が妨げられるという戦時のように暮らす感覚を覚えた。私はむしろ、この前例のない状況に対して、自宅で芸術活動の設計のために仕事をし、将来おくりたいと思う人生の意味やその方法について、しっかり考えてこの期間を過ごすことができた。

5月11日に、隔離の解除の始まりが示された。フランス人は徐々に仕事場への途につき、商店の多くが再開した。私自身は6月2日から、パリでのフランス語学校での教師の仕事を再開する予定だ。人生は続く。各自が様々なやり方で乗り切ろうとするこの試練は、人生がより貴重なものを持していることを私たちに自覚させてくれるはずだ。

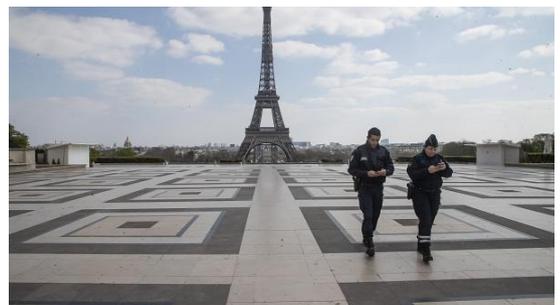
La pandémie mondiale de coronavirus a donné lieu à des réponses sans précédent, de nombreux pays touchés confinant les résidents chez eux. Tout comme le reste de l'Europe, la France a été durement touchée par l'épidémie et a mis en place des mesures de confinement depuis le 17 mars avec pour objectif de réduire significativement la circulation du virus dans la population. Le 21 mai 2020, le bilan est de plus de 28 000 décès et près de 18 000 personnes hospitalisées.

La vie se trouve bouleversée par le virus notamment à cause de la distanciation sociale qui ne va pas de soi dans la culture française. Les gens se saluent à distance, ne se touchent plus et pour bon nombre portent un masque. Les gestes d'affection se font plus rares et cela touche profondément l'attitude et les comportements de chacun. Ne pas embrasser les êtres que l'on aime est douloureux. Pendant presque deux mois, les rues étaient quasi désertes, les magasins fermés et les lieux culturels et de pratique sportive inaccessibles.

Le sentiment de vivre comme en temps de guerre a été ressenti par une partie de la population dont la liberté de sortir était entravée. Pour ma part, j'ai plutôt bien réagi à cette situation inédite en travaillant chez moi sur des projets artistiques et j'ai profité de cette période pour réfléchir au sens de l'existence et à la manière dont j'aimerais mener ma vie dans le futur.

Le 11 mai a marqué le début du déconfinement, progressivement les Français retrouvent le chemin de leur bureau et la majorité des commerces ont réouvert. Je vais recommencer à enseigner à l'Institut de Langue Française à Paris le 2 juin. La vie continue, et cette épreuve que nous traversons tous d'une manière ou d'une autre, doit nous faire prendre conscience que la vie est ce que nous avons de plus précieux.

(Pierre Silvestri)



写真：(上から) ひとけのない凱旋門、ひとけのないトロカデロ広場、マスクの着用、買い物のための行列

ホームズ物語とフランス（2）

長谷川明子

『緋色の研究』で初対面を果たし、ロンドン、ベーカー街 221-B で一緒に下宿生活を送ることになったワトソン博士は、ホームズのエキセントリックな性格に戸惑ったり、傲慢な態度に腹を立てたりしながらも、探偵として有能な彼を尊敬し、よき相棒として信頼と友情を抱くようになる。しかし、家族のことや少年時代のことなど一度も話そうとしない彼に対しては、正直な気持ちとして、「知的に卓越してはいるが、人情を欠いた、心臓のない頭脳だけの男 ...an isolated phenomenon, a brain without a heart, as deficient in human sympathy as he was pre-eminent in intelligence.」と思うことさえあり、それゆえ生きた身寄りもない人物だとすら思っていた。（「ギリシャ語通訳」The Greek Interpreter, 1893, 新潮文庫『シャーロック・ホームズの思い出』所収）

ところが、何気ない会話の中で突然ホームズは、自分の推理力や観察力は自身の訓練によるものというよりはむしろ遺伝的なもので、特に母方の祖母から受け継がれている、と語り始める。祖母はフランス人画家ヴェルネ (Émile Jean-Horace Vernet, 1789~1863) の妹であり、芸術家の血は変わった形で自分や兄に現れているらしいと語る。ここで紹介される兄マイクログト (Mycroft, 右下挿絵) は、この後のいくつかの事件で、英国政府の重要な役人として、ホームズの捜査を助けることになる。(注1)

歴史上、英国とフランスといえば敵対関係にあったことが多い。ホームズが活躍した時代、両国は植民地をめぐり互いにしのぎを削っていた。そんな中、あえてホームズの「第二の故郷」は母の実家があるフランスであるとし、実在のフランス人画家が大叔父であるとの記述を入れていることにより、これまで、作品の中でホームズがフランス語を頻繁に口にしたり、フランス人作家の引用句をよく使うことなどが納得できるばかりでなく、フランスでの多くの事件解決に貢献した功績により、フランス政府からレジオン・ドヌール賞を貰った（「金縁の鼻眼鏡」The Golden Pince-Nez, 1904, 新潮文庫『シャーロック・ホームズの帰還』所収）、などの記述も自然に受け入れられる。ちなみに、作家コナン・ドイルの大叔父で名付け親であるマイケル・コナンはパリに住んでいた。

「ギリシャ語通訳」はホームズの出自に触れている点で興味深いばかりでなく、言語に視点を向けても面白い。ギリシャ人の富豪の娘を誘惑し、財産を奪おうとしている悪人が、彼女の兄に財産譲渡の署名をさせようとするが、ギリシャ語が出来ないため通訳メラスを拉致してくる。事情が分からないまま、脅迫めいた英語をギリシャ語に、ギリシャ語を英語に通訳することを通して、メラスは少しずつ自身の言葉を付け足して、捕らわれ人（娘の兄）と秘密の会話を交わし、事態打開の糸口を探ろうと試みる。直接会話を交わしている兩人だけに通じるコミュニケーションを挟むということは、一種の暗号となり、悪人に悟られまいと様子を伺いながら通訳していく場面は、スリリングである。また、この作品のタイトルや内容から、英語の有名な慣用語、「It's Greek to me. 私には全くちんぷんかんぷんだ」を連想する人もいるだろう。（シェイクスピア戯曲『ジュリアス・シーザー』第1幕第2場。(注2)

次回は、ヴェルネも描いたナポレオンとホームズ物語について書きたいと思う。

(注1) 「最後の事件」(The Final Problem, 1893)、「空き家の冒険」(The Empty House, 1903)、「ブルース・パティントン設計書」(The Bruce-Partington Plans, 1908)などに登場。

(注2) William Shakespeare, *The Tragedy of Julius Caesar*, Act 1, Scene 2 ; Cicero キケロのギリシャ語の演説を聞いた Casca キャスカのことば。



ドイルが「ストランド・マガジン」に連載していた「シャーロック・ホームズ」シリーズの挿絵の多くは、イラストレーターのシドニー・パジェット (Sidney Paget, 1860-1908) によって描かれた。彼の深みと陰鬱のあるイラストは、当時のホームズ・シリーズの人気を高めただけでなく、後世のフィルムノワールやホームズ映画に大きな影響を与えている。「鹿撃ち帽とインヴァネス・コート」のホームズ像（左図「ボスコム谷の謎」より）は、原作のドイルの文章には存在せず、パジェットによる創作。中央と右の図は、「ギリシア語通訳」に登場するホームズの兄のマイクログト。(編集部注)

「モリエールの喜劇」(5) 『人間嫌い』 (Le Misanthrope, 1666)

山本 邦彦

『人間嫌い』は、『タルチュフ』に続き『ドン・ジュアン』も上演ができなくなり、心労が重なりうつ状態になったモリエールが、1666年に書き上げた渾身の5幕韻文劇です。

主人公のアルセストは誠実・率直をモットーとする正義感の強い青年です。彼には宮廷や社交界にはびこる軽佻浮薄な風俗が我慢なりません。お世辞を言い合ったり、陰口をたたいたり、何もかもが虚栄と偽善の現れのように見えます。

しかしながら、アルセストの行動の中には、ひとつ大きな矛盾があります。それは社交界の花形ともいべき若くて美しい寡婦セリメヌに恋をしているということです。彼女は男たちからちやほやされるのが好きな、コケットです。ひとの悪口を言うのも大好きです。本来ならアルセストが嫌うはずの世界にどっぷり浸かっている女性です。しかし彼にはこのことに限ってその自覚がありません。そこがこの喜劇の「喜劇」たるゆえんです。

アルセストには友人フィラントがいます。彼は潔癖なアルセストとは反対に、温厚なよき社交人です。人々の欠点にいちいち腹を立てずに寛大に受け止め、争わず穏やかに中庸の道を歩むべきだと説きます。モリエールの芝居には、フィラントのように、主人公の奇癖をたしなめ中庸と寛容を説く人物がよく登場します。一般にはモリエールの代弁者と見なされていますが、『人間嫌い』の場合、そう単純ではありません。アルセストの中にも作者の熱い思いが込められているように思えるからです。

ヴォルテールは『人間嫌い』を評して「知識人にはうけても大衆にはうけない。舞台で観るより読む方がよい」と言いました。ルソーは「有徳の士を笑いものにするのは許せない」と言いました。18世紀を代表する2人の思想家の興味ある発言です。



左 ジャン・ルイ・バロー (アルセスト)
右 マドレーヌ・ルノー (セリメヌ)

フランス語で読む日本古典：与謝蕪村 (Yosa Buson, 1716-1784)

与謝蕪村は俳人・画家で、松尾芭蕉や小林一茶とともに、江戸時代の傑出した詩人のひとりです。以下に蕪村の俳句を3首紹介します。彼のシンプルで優美な世界の捉え方や、内面に流れる時間のあり方を感じることができるでしょう。かけがえのない時間は、いったんは忘れても、彼の内面では、永久に持続しているのかもしれない。Yosa Buson est un poète d'haïku et un peintre. C'est l'un des plus remarquables poètes de l'époque d'Édo avec Matsuo Bashô et Kobayashi Issa. Voici trois de ses haïku. On pourra ressentir sa manière simple et élégante de saisir l'univers et sa perception du « temps » intérieur. Les moments chéris de la vie semblent se perpétuer infiniment dans son cœur,

| | | |
|---|---|---|
| <p>花に来て花にいねぶるいとまかな hana ni kite hana ni ineburu itoma kana Venant vers les fleurs n'assoupissant sous les fleurs — ah! quel passe-temps</p> | <p>春の海終日のたりのたり哉 haru no umi hinemosu notari notari kana La mer au printemps tout au long de la journée sa danse ondulante !</p> | <p>冬籠心の奥のよしの山 fuyugomori kokoro no oku no yoshino yama Retiré l'hiver mais le cœur encore plein du mont Yoshino</p> |
|---|---|---|

今年2月20日に逝去された比較文学者の芳賀徹さんは、蕪村のことを「籠り居の詩人」と呼んでいました。蕪村は、小さな家に籠って終日暮らすことにささやかな喜びを感じながら、普遍的な人間や世の姿を見通して、芸術家として魅力的な画をたくさん描いています。おそらく、心の奥に「桃源郷」を養いつつ。(浅井直子)

Tôru Haga, chercheur de littérature comparée, décédé le 20 février 2020, appelait Buson « le poète casanier ». Buson, en éprouvant un peu de plaisir à s'enfouir dans une modeste maison, pénétra l'essentiel de l'être humain et du monde et peignit de nombreux tableaux dignes d'intérêt en tant qu'artiste. Peut-être qu'il caresse ses images de « Tôgen-kyo » (une forme de paradis asiatique) au fond de son cœur.

※参照：芳賀徹著『桃源の水脈』(2019) 『詩歌の森へ』(2002) 『与謝蕪村の小さな世界』(1986) 他；Buson 66 HAIKU, Éditions Verdier pour la traduction française, 2004.



『十宜図』(1771)より「宜夏」

パリでの生活 (1987-89)、「堺事件」記念式典 (2018-2020)

西野 典子

1987 年秋から 1989 年の二年間、私は主人の仕事に同行してパリに滞在した。少々不安もあったが、到着後は街全体が美術館のようで、絵のように美しい街並のパリで暮らせる事に期待が高まっていた。

その時期パリは、1988 年ミッテラン大統領再選後、力を入れていたフランス革命 200 年を記念する大規模な都市再開発と文化施設の新築・改造によるパリ大改造の真只中だった。町中あちらこちらに囲いが巡らされ、パリの建物の上には高所作業車のクレーンが腕を伸ばしていた。ルーブル美術館はガラスのピラミッド建設のため広範囲にフェンスで囲われ、凱旋門はお化粧直しの為トリコロールのネットが被せられた。郊外のデファンスの新凱旋門の建造中など工事にも活気があった。

私達の住まいは 13 区からメトロひと駅出たクレムラン・ビセートルという町。主人が出勤後、私は地下鉄・バスを自由に乗降できるカルト・オランジュという写真付きの定期を利用し毎日パリの町中を訪ね歩いた。パリの町には魅力的なお店が多く有る中で目を引いたのは花屋さんだった。可愛らしい花がカラフルにウィンドウを飾り、可愛いブーケを持った人が出入りするの、パリらしい光景の一つだった。フランスにも日本の生け花のようにお花の教室があることを知り、早速通うことにした。日本の生け花では花の茎や枝の線も見せる活け方をするが、フランスでは茎を短く切り落して花の顔(?)を面として使うことが多く、花の使い方が全く違うことに驚いた。

その教室通いがきっかけで、革命 200 年記念イベントの一つ、ヴェルサイユ宮殿で行われる“Festival International



D'art Floral de VERSAILLES” のコンクールに出品することになった。テーマは革命から現代までの 200 年を時代のイメージによって 8 つの部門に分けられ、私は“Les Fleurs et le Romantisme” という部門を選んだ。当日の早朝たくさんのお花を入れたバケツと大きな荷物を持って自宅からヴェルサイユ宮殿へタクシーで駆け込んだ。場所は Galerie de L'Aile du Midi (南ウィング)、スタッフに案内されたブースに私の名前があり、1 時間半の活け込みに奮闘した。午後から結果発表があり自分の作品がまさかの部門一位。ヴェルサイユ市庁舎での表彰式 (左写真)、その後のレセプション、翌日の新聞には名前も載り、思い掛けないご褒美となった。

1989 年 1 月は、昭和天皇崩御のニュースがフランスでも大きく取り上げられ、天皇陛下の写真が多くの雑誌の表紙を飾っていた。一方、街は革命記念日へと着々と準備が整い、1889 年建造のエッフェル塔には《100 ans》(百年)のイルミネーションが灯された。7 月 14 日、シャンゼリゼ通りの軍事パレードは日本企業の友人の招きで通りのビルから見学ができ、国歌『ラ・マルセイユーズ』が心に響き渡るような勇壮な行進や賑々しい光景に大変感動した。今ではすべてが夢のようだ。

帰国後もフランスの事にアンテナを張り続けている。一昨年 2018 年は日仏友好 160 年。私の住む堺では、1868 年に日仏間で銃撃戦から切腹に到った「堺事件」が起きて 150 年で、それを機に事件の犠牲となった両国の死者 22 名の法要の記念式典が計画された。2018 年から今年迄 3 回行われ、私はスタッフとして関わり、式典の司会のお手伝いをさせて頂いた。「堺事件」とは、慶応 2 年 2 月、急遽堺の警護を任された土佐藩士が、堺に来港したフランス軍艦から上陸して来た水兵に対し発砲し、十数名を殺傷した。それに対しフランス側から土佐藩士に切腹が言い渡され、堺の妙國寺で両国代表者立ち合いの下、土佐藩士 11 名の切腹が行なわれたという事件だ。(「堺事件」の関係図書には、『堺港攘夷始末』大岡昇平、『堺事件』森鷗外等がある)

今年の式典には、在京都フランス総領事館からジュール・イルマン総領事にも来て頂き「悲しい出来事を乗り越え、現在の素晴らしい交流が有ることは意義深い」とのスピーチを頂いた。(右写真：背景はフランス人水兵さんの名前を書いた卒塔婆)



過去の歴史を知って、更にフランスの事が理解でき、奈良日仏協会でも今たくさんの日仏交流の機会があることを嬉しく思う。

ジョルジュ・サンドの『アンディヤナ』

村田 京子

コロナ禍のせいで二か月以上にわたり、巣ごもり生活を続けてきました。6月にはパリでのバルザックのシンポジウムに参加予定で、久しぶりのパリ滞在を楽しみにしていましたが、残念ながら延期になりました。日本でも神戸で開催予定のコートールド美術館展に行くのを楽しみにしていたのに、これも中止に。

外に出られなくなったので、仕方なく(!) ジョルジュ・サンドの『アンディヤナ』を読み返し、論文を書くことにしました。最近の私の研究は、19世紀フランス文学と服装の関係を探ることで(2年前の「秋の教養講座」では、服装を通してバルザックの作品を読み解きました)、今回はサンドの作品に挑戦してみました。『アンディヤナ』において服装がどのような役割を果たすのか、その一部(女主人公が舞踏会に初めて出る場面)をここで紹介したいと思います。

舞踏会が開催されたのは、王政復古末期、ベリー公爵夫人がファッション・リーダーとなって、革命前の贅沢で華美な服装への回帰を目指していた時期にあたり、舞踏会に集う女性たちは「ダイヤモンドや羽根、花々」で飾られた当時流行の衣装(右図)を纏っていました。こうした派手な衣装の中で、真珠のネックレスに白の「シンプルな衣装」のアンディヤナは、逆に人目を引き、人々の注目の的になります。彼女の清楚な衣装は白い肌と相まって、その純潔性を際立たせるものでした。しかも、小柄でほっそりしたアンディヤナは、あまりに軽やかにダンスを踊るので、朝になると消えてしまう「妖精」や「霊」に喩えられています。こうした「はかない女性のイメージ」は、ロマン主義時代の理想的な女性像に合致し、さらに、19世紀に新しく登場したロマンティック・バレエを彷彿とさせます。現在、私たちが頭に浮かべる爪先立ちで踊るバレリーナのイメージは、この時代に始まるもので、能澤慧子氏『モードの社会史』、有斐閣選書)は、次のように説明しています。



女性バレリーナの非人間的なまでの跳躍と旋回はそれまでの男性舞踊家のそれらを遥かに凌ぎ、また足が地につくことを最小限にとどめるためであるかのごときトゥ・ダンスの技術と相まって、彼女らを地上から空想の世界の高みに引き上げた。[...] この期のバレリーナたちが身につけたのはそれまでの重厚な衣装に代わって、ゴーズ[紗や絹のような薄い生地]を何枚にも重ねたふくらはぎの半ばまでの丈のスカートのついたドレスであって、これは彼女らの空気のような身の軽さを見事に演出した。これが今日のロマンティック・チュチュの始まりである。また背中にとりつけられた小さな翼、上腕の半ばあたりに付いた、ふくらんだ小さな袖、細いウエスト、白や薄い色彩など、彼女らの衣装の細部の一つ一つが、彼女らを人間ではなく、天空へと繋がる霊的な存在であることを暗示している。

下線部にあるように、アンディヤナの身ごなしは、バレリーナのイメージと重なります。ロマンティック・バレエの嚆矢となるのは、「空気の精」と人間の青年の悲恋を描いた『ラ・シルフィード』で、1832年3月にオペラ座で初演され、シルフィードを踊ったマリー・タリオニ(右図)は一世を風靡します。同年5月に出版された『アンディヤナ』において、サンドがこのバレエを参照したかどうかは定かではありませんが、アンディヤナはシルフィードと同様に「身体性の希薄な女性」と言えるでしょう。

しかしながら、乗馬服姿の彼女は別の側面を見せるなど、複雑な女性性の持ち主として描かれています。また、アンディヤナとは正反対の「官能的」なヌン(アンディヤナの乳姉妹)も登場し、それぞれが変装する場面もあります。

このように、海外に出かけることが不可能な現在、想像の世界で異空間に身を置いて楽しんでいます。ともあれ、コロナ感染が終息して、自由に動ける日が訪れることを願っています。



多言語を学ぶ面白さ

濱 恵介



月曜日から金曜日までの毎朝、私には NHK ラジオの語学講座を聴くという日課がある。7 時「まいにちドイツ語」から始め、スペイン語、フランス語、イタリア語、朝鮮・韓国語（ハングル講座）そして中国語まで続けて学ぶ。15 分ずつ 6 講座だから終わるのが 8 時半になる。

学習の動機は必要性や義務感ではない。知らなかったことを知る、外国語の学びを通じて異文化を垣間見るのが楽しいから続けているのだ。それに、テレビと違ってラジオは聴覚と言語脳だけを向ければ済むので、他の用事をしながらでも出来る。例えば朝食の片付けや庭仕事をやりながら学習する、という時間の有効利用である。近年はたまにしかテキストを購入しないし、ノートも取らない。中国語を除き、それぞれの書き方は大体見当が付く。そのような手抜きが長続きしている秘訣かも知れない。

これらの他に私は英語とインドネシア語を習得したから、レベルの違いはともかく、日本語を別にして 8 カ国語に馴染んだことになる。これに言及すると「いろいろやり過ぎて混乱しないか」という質問を受けたりする。特に困った現象はないが、混同を避けるために心掛けているのは、その言語らしい発音や抑揚をなるべく正しく実践すること。もっとも、イタリア語とスペイン語は語彙も語感もかなり近く紛らわしいので、地図をイメージして区別するようにしている。

母国語のみ又は一つだけ外国語を学ぶのとは異なり、いろいろな言語に触れることで文化の影響関係をより深く知ることができて、これがたいへん面白い。外来の単語や文字に関して由来、変化、訳語創出、逆流などから、民族の交流や衝突の歴史に思いをめぐらせるのだ。もう一つ感慨を加えると、「高齢になっても言葉を学べる」と思えることが嬉しい。これは記憶力よりむしろ好奇心のお蔭か。あるいは、若い頃に得た「外国語を日本語に訳さず直接理解する」という感覚の助けによるのかも知れない。実用の機会があれば、なお嬉しい。

「知るたのしみ」は人生における満足感の中でもとりわけ大事なものと私は思う。歳を取るにつれ体力が衰えるのは仕方ないとして、知的な意欲は最晩年まで残って欲しい心の作用である。

世界に友情の輪を広げる

大西 弘

私は仕事の関係で 22 年間も海外で暮らす経験をさせて頂いたお陰で、多くの友人知人に出会う幸運に恵まれました。長い海外生活の中で私が学んだ大切な事が一つあります。高度成長期でひたすら会社の為に働く事が当たり前の時代に、ヨーロッパの人達は仕事よりもむしろ、家庭や私生活を優先する価値観を持って生きている事を知り、大きなショックを受けました。当時の日本のサラリーマンにはほとんど考えられない価値観でしたが、若い私には衝撃的であると同時に新鮮でもあり、魅力的に映りました。そして、これが間違いなく私のその後の生き方に大きな影響を与えました。

だからと言って仕事を疎かにした事は特にありませんが、60 才の定年を迎えたら、きっぱり仕事を止めて新たな人生を歩む決心だけは早くからしておりました。そして、定年と同時に海外での貴重な経験を活かして少しでも社会のお役に立つ事が出来ればとの思いから、国際交流組織を立ち上げる準備を始め、不思議なご縁があって、約 1 年後に米国のアトランタに本部を置く「フレンドシップフォース」というホームステイ組織の奈良支部を立ち上げました。この組織は世界約 60 ヶ国に 360 のクラブと約 15,000 人の会員を有する国際的ホームステイ組織です。私が設立した奈良クラブは、今年 20 周年を迎え、約 90 家族の会員が、活発に渡航や受入れの他、様々なクラブ活動を楽しんでいます。

フレンドシップフォースの活動は、私自身のライフワークとして今でも情熱的に続けていますが、数え切れないほどの友人や知人との出会いを通して通常の旅行では決して得られない貴重な体験をすると同時に、世界中に友情の輪を広げる事に大きな喜びと誇りを感じています。個人的趣味としては長く続けて来たゴルフとコーラスを楽しんでいますが、一方で夫婦で日常生活のあらゆる面で共通の時間を過ごす事が出来るようになったのは、欧州時代に新たな価値観と生き方を学んだお陰だと思っています。



モーリシャス旅行の思い出

小寺 順子

2019年12月末COVID-19の感染が武漢で始まった。その時は誰が今日の様な状態になると予測しただろう…。

2020年3月2日、私達夫婦は不安を抱えながらも台北に出発した。台湾は政府の対応が早く、国民一人に週1回2枚ずつマスクが配られ、ホテルやデパートの入り口では検温と消毒がなされた。私達の旅行は決して心から楽しいものではなかったが、何とか3月7日には無事に日本へ帰れた。

2019年11月のまだコロナなど想像にもつかなかったころ、私達はモーリシャス島を訪れた。学生時代にモーリシャスに人が乗れるような大きな大オニバスがあるのを写真で見てからずっと行きたいと憧れていた旅行がやっと実現した。実際の大オニバスは1メートル弱の小さなものでがっかりしたが、泊まったホテルは素晴らしく、大いにリゾートを楽しんだ。ホテルに着くなりウェルカムドリンク、部屋にはスパークリングワインと果物、広くて地図や建物の番号を見て歩かなければならないような広い敷地。イルオセルフという有名なビーチの半分がホテルのプライベートビーチであった。

モーリシャスはフランスの植民地だと思っていたが(1715~1814年、フランス領で「フランス島」と呼ばれた。ベルナルダン・ド・サン=ピエールの小説『ポールとヴィルジニー』(1788)の舞台になっている)、実際はポルトガル、スペイン、フランス、イギリスに占領され公用語は英語で、プライベートではフランス語と土着の言語が話されている。今回訪れたのはモーリシャスだけだったが、私はその近くの島であるレユニオン島(フランスの海外県)に友達が2人いるので、次回は是非この2つの島を一緒に訪れようと思っている。

今年の6月はバンクーバーにいる97歳の叔父を訪ねて、帰りにアラスカのアンカレッジから電車で4時間バスで1時間というところに住む知人を訪れるつもりだったが、早々にキャンセルした。いったいこれらの国を訪れることができるのはいつになるのだろう。一日も早く「隔離」(confinement)を強いられる病の心配から解放されることを願ってやまない。



シャンソンを夢見て…

中辻 純子(梨里香)

シャンソンを歌い始めてまもなく15年になります。キャリアの長さ(?)に驚かれることもありますが、人生半ばを過ぎてのデビュー故、ようやくの15年です。シャンソンを原詞で歌いたいという思いから始めたフランス語。留学をし、資格も取り、ガイドや語学講師を務めながら、結婚、出産...と日々を重ねていく内に、かつての夢は日常の隅に追いやられてしまいました。その忘れかけていた夢を目覚めさせ、礎を築いて下さったのはフランス語の恩師 故松島征先生です。

もう、20年近くになるのでしょうか...。子育ても一段落し、仏語に磨きをかけようと京都大学の先生を訪ね、それからご退任までの数年間、ご専門の記号論から文芸作品、シャンソンフランセーズに至るまで広範囲に指導して頂きました。殊に文学的シャンソンの解釈や歴史的背景については、目から鱗の指南を頂きました。先生は現役の歌手の方々とも交友がおり、その中のお一人の紹介でオーディションを受け、デビューすることができました。勿論、本当の修業はそこからです。歌や声のトレーニング、身体作りは当然のこと、レパートリーを増やしアレンジを変え、果ては衣装やメイキャップに至るまで、プロとして活動する厳しさを身をもって知りました。

奈良日仏協会の皆様には、2007年12月の「日仏文化サロン」のゲストに呼んで頂いて以来応援して頂き、2010年に入会してからは、シャンソン講座を開講し、ボジョレヌーヴォーの会やフランス・アラカルト等で、歌わせて頂きました。今では恒例となったサンケイパリ祭出演やテレマンアンサンブルとの共演ですが、その頃の経験が大きな力となっています。また、昨年の創立25周年記念の祭典では、ピアフの「愛の讃歌」、「パリの空の下」、自身の仏訳による「ハナミズキ」を披露させて頂けたことが、忘れられない思い出となっています。

最後に私の体験からの格言をひとつ…。

“Mieux vaut tard que jamais.” (遅くともなさざるに勝る)



第 145 回 フランス・アラカルト「登大路ホテル奈良にてフランス料理の昼食会」(7/11)

6 月以降、幸いなことに、関西とりわけ奈良ではコロナ感染者数は少ないままに留まっており、登大路ホテル奈良にてのフランス・アラカルトは、予定通り開催の方向で準備をすすめております。当日は、当協会会員で同ホテル支配人の上野正暢さんのお話をお聞きし、会員同士の懇親を深めながら、同ホテル総料理長の仙石耕一さんによるフランス料理のランチを楽しみたいと思います。とはいえこれから、個人が手洗い・うがい・マスク着用等で感染予防を怠らず、健康な日々をおくることを願いつつ、すでに参加申込みされた方で、もし体調に異変が生じた場合には、すみやかにご連絡お願いいたします。



- ❖ 日時：7 月 11 日（土）11:30～13:30
- ❖ 場所：登大路ホテル奈良（近鉄奈良駅より東へ徒歩 3 分）
- ❖ 会費：5,500 円（飲み物は各自負担となります）
- ❖ 定員：15 名（要予約）6 月 30 日までの申込み、満席になり次第締め切り。
- ❖ 問合せと申込先：sachiko_kita@kcn.jp tel. 090-5153-2630（喜多）

第 54 回奈良日仏協会シネクラブ例会（7/26）「海辺のポーリーヌ」(Pauline à la plage, 1983)

4 月発送の Mon Nara 通信第 6 号では、会場を「奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室（予定）」とお知らせしていましたが、参加者同士の距離をとるために、生駒市セイセイビル 2 階 206 会議室に変更しました。

- ❖ 日時：2020 年 7 月 26 日（日）13:30～17:00
- ❖ 会場：生駒市セイセイビル 2 階 206 会議室
- ❖ プログラム：『海辺のポーリーヌ』(Pauline à la plage, 1983)
- ❖ 監督：エリック・ロメール Eric Rohmer
- ❖ 参加費：会員無料、一般 300 円
- ❖ 例会終了後「カルメシ茶屋」にて懇親会
- ❖ 問い合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300（浅井）
- ❖ 映画の紹介は本誌 2 頁参照

《2020 年度第 2 回理事会報告》.....事務局 日時：2020 年 6 月 4 日（木）15:00～15:50。
 場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、藤村、中辻、高松、喜多、藪田、杉谷。議題 1. 2020 年度会員数：件数 93 件、うち会費納入 63、未納 28、新規入会 1、退会 2。議題 2. 3/12 理事会後の活動：美術クラブ第 3 回例会(5/30) 中止。議題 3. 今後の行事：(7/11) 第 145 回フランス・アラカルト、(7/26) 第 54 回日仏シネクラブ例会、(10/10) ガイドクラブ「聖林寺と談山神社、(11/23) 秋の教養講座、講師三野博司「カミュ『ペスト』を読む」、(時期未定) 第 146 回フランス・アラカルト、包丁鍛冶職人エリック・シュヴァリエさんのお話。議題 4. Mon Nara。議題 5. その他：次回理事会 7 月 16 日（木）15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆「私は今、この生命の不安な流行病の時節に、何よりも人事を尽して天命を待とうと思います。」（与謝野晶子の言葉、1920 年 1 月 25 日「横浜貿易新報」に掲載された随筆より）。1918 年スペイン風邪が流行し、晶子の 10 人の子供も次々と感染したそうです。母として必死に看護にあたった社会的影響力のある文学者の声は、百年後の後世に生きる私たちのもとにも届きます。☆奈良日仏協会の会員と会員家族の皆さまの中には、緊急事態宣言発令中も、介護施設や医療現場での仕事のため、また通院や入院のため、感染予防等で緊張感を持って過ごされていた方もおられると思います。私自身はこの期間、あまり外出せずに家事や庭仕事に精をだし、かえって仕事がふえて疲れも感じていましたが、日々大変な思いをしている会員の皆さんから直接間接に届く便りに、励まされていました。☆6 月になると庭の紫陽花 (hortensia) が花開きはじめました。12 年ほど前に生駒に越してきた頃、会員の方からいただいて地植えし、以来ほとんど手入れもしないのに毎年可憐な花を咲かせ、心なごませてくれます。☆与謝野晶子にも紫陽花を詠った短歌がありました。「紫陽花も花櫛したる頭をばうち傾けてなげく夕ぐれ」。じっと紫陽花を見つめ、形態から花に心情を投影させる歌人の姿が思い浮かびました。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 10 月号は **9 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2020 年 6 月号 numéro293

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司